

2019. 2. 3. 降誕節第6主日礼拝式説教

ダビデ王物語講解説教

聖書：サムエル記下19章32-40節

『神の訓練』

人が生きるということはたくさんの困難ややっかいなことがあります。その一つは、判断する、ということです。人との関係の中で、仕事で、家庭の中で、さまざまな事柄の中で、判断を迫られること、決めなければならないことが出てきます。単純な判断もあるかもしれませんが、どう判断したらいいのか、なかなかむずかしい場合もあります。そもそもどうそのことを受けとめたらいいのか、という場合も少なくない。それはたとえ小さなことであっても同じようにやってきます。どこの病院にかかるか、ということひとつとっても判断するのが難しい、と思う人もいるでしょう。ましてや人生の大きな事柄であれば、判断することはいろいろな難しさを含んでいます。判断することがむずかしいと感じる理由は、この判断が正解だ、というようなことがあると思える場合はともかく、そういう正解のようなものはない、という場合は少なくないからです。一問一答のような答えがあるわけではない。そして一つの判断を仮にしたとして、それが正しかったとは言い切れないものが残る場合も少なくないからです。人間はたくさんの判断や、決めなければならないことの中で生きていくともいえます。そしてその中で人はしばしば正しい答えがわからないままに判断して生きる、という不安定の中にあり続けるのです。ダビデもまた、一人の人間として、判断するということでは、ずいぶん苦しんだり、思い悩んだのではないかと、思います。

実の息子アブサロムと敵味方に分かれて戦った戦争が終わりました。

今朝はサムエル記下の19章に登場する部族、人物をまとめたものを印刷しました。それを見ながら、説教に聞いてくだされば、と思います。

戦争が終わって最初に動いたのはイスラエルの諸部族です。彼らはアブサロムを支持し、その軍隊に入ったのですから、今ここでダビデを付かなければ、後は戦うか、ダビデによってなんらかの罰を受けるしかないのです。彼らは早速、ダビデを王として受け入れるため、自分たちがいち早くエルサレムに呼び戻すべきだと考えます。虫のいい、自分勝手な、ご都合主義極まりない考えで

す。しかし、それが彼らにとっての生きる知恵です。ダビデはこうしたイスラエルの部族の声を聞き、ユダの部族を焚きつける。お前たちがイスラエルの部族に後れを取っていないのか、と。こうしてダビデは、イスラエルの諸部族とユダの部族を競合させつつ、北と南の全体を再び統一させていこうとするのです。こうした中、ダビデはエルサレムへと向かっていく。そのダビデのもとに来た人たちの姿が19章には描かれているのです。

まずシムイがやってきました。

シムイはダビデがエルサレムを出て行くときに、呪った人です。石を投げつけた人です。サウル家に属する者で、何らかダビデに恨みを持っていたのかもかもしれません。そのシムイが真っ先にやってきた。「自分が犯した罪をお忘れになってください。」「わたしは自分の犯した罪をよく存じています。」だからこそ、今日真っ先にあなたのもとにやって来て、王としてあなたをお迎えするのです。これもまた全く虫の良すぎる、あまりにも身勝手な発言です。ダビデの部下アビシャイはこのようなものが死なずに済むはずがない、と厳しく王に迫ります。だがダビデはここで一つの判断を下す。わたしはあらためてイスラエル全体の王になるのだ。この国の王だ、そういって、シムイに対して死刑にすることは、という。ダビデがどういう思いからシムイに何の処罰ものを与えないのか、それはよくわからない。またあらためて王位につくその喜びの日に刑の執行はふさわしくないと考えたのか。しかしこの後聖書を読んでいくと、ダビデはシムイのことを赦してはいなかったことが記されていて、あらためてこの判断は何だったのだろうかと思うのです。

ツィバもダビデのもとに来ます。ヨルダン川を渡るときダビデ王家の人々を担いで渡るため、勝利者、王であるダビデに自分をアピールしたかったのか。力あるものに群がる人はいつでも多い。

それからやってきたのは、メフィボシェトです。彼は足も洗わず、髭も剃らずといった風采でダビデのもとに来た。なぜおまえは戦の時にわたしのもとに来なかったのか、とダビデが尋ねると、メフィボシェトはそのわけをあれこれと述べた。

自分は足が悪く、それでも戦いに参加しようと思っていたが、よからぬ中傷を耳にして、どうのこうの。足も洗わず髭も剃らずというのは、悲しみの態度、自分もこうしてダビデの苦しみに連なっている、という態度とも受け取れるのです。彼はサウルの王の孫でもあり、彼のダビデに対する気持ちは一様ではない、と想像もできます。ダビデはもう自分のことを話す必要はない、と言って、

以前メフィボシェトの相続した土地を全部ツィバに与えたことがあったのを、それを二人で分け合え、というのです。つまりメフィボシェトの今回の態度を評価したのです。

さらにその後バルジライが来ました。バルジライはこの度の戦いで、ダビデがマハナインに陣を張った時、さまざまな形で支援した人物で、ダビデがエルサレムに帰還するというのを見送ろうと思いやってきたのでした。ダビデはバルジライに深く感謝し、その恩に報いたいと願って、できればエルサレムに来てほしいと願ったのでした。しかしバルジライは高齢でもあり、自分は後何年生きられるかわからない、判断力も落ち、エルサレムに行っても王の重荷になるだけです。自分は父母の墓のある町で死にたい、と言ってダビデの申し出を断り、逆に自分の僕をダビデにお供させます、と言って王への敬意と礼を尽くそうとするのです。ダビデはバルジライの申し出を受け入れ、バルジライの思うとおりに応えるのです。

ダビデはここで、次から次へと判断を下しています。判断は難しい、やっかいだ、ということを最初に言いました。それは誰にとってもそうです。

自分を呪い、自分に石を投げつけてきたシムイを何の処罰も与えず、しかも「死刑にはしない」という言葉だけ与えて、ゆるすともゆるさないとも言わなかったシムイへの判断はあれでよかったのか。アビシャイがシムイのことで腹を立て、死なずに済むか、と言ったのを遮ったダビデ。だがアビシャイの言葉は、ダビデの中にもあった声だったのではないか。ツィバは自分をアピールするためにわざわざ来たのでしょうか。自分の仕えるメフィボシェトは身体障害者で、うだつが上がらない。だからこそ、必死に時の権力に媚を売ろうとしたのかもしれない。それに対してダビデはどういう態度を、判断をすればよかったのか。ツィバに対してはダビデはここでは何も言わない。何も判断しない。

そしてメフィボシェトに対して。彼は心から自分に感謝し、心から自分に仕えようとしている、そうダビデは受けとめていたかどうか。わからない。ダビデ自身メフィボシェトの真意がどこにあるか、測りかねていたのではないか。それでも判断しなければならなかったし、したのではないのか。

バルジライとの出会いはダビデにとって、感謝に溢れた出会いだったのでありましょう。自分が本当に苦しい時、困難にあったとき、自分から去っていく人がいたとき、自分を本当に支え、支援してくれた人。そして今また自分が王としてエルサレムに帰還するとき、励ましのうちに見送りに来てくれたバルジライ。自分の損得ではなく、礼節を尽くし、今の自分というものをわきまえ、

役割を知り、判断する能力はもうないと言って、自分の判断を示した。バルジライに対しては、ダビデは自分の判断に固執する必要はなく、ただバルジライの判断に自分が従うことができたのです。

人が判断することは難しい。やっかいです。どれが正解でどれが間違っていた、などと容易に判別できない。しかしそれでも人はいろいろな場面で判断を迫られる。クリスチャンだから、良い判断ができる、というわけではないし、その筋道が見通せる、というわけでもない。ダビデもまた一人の人間として、迷いや分からなさの中で、判断することも多かったですよ。

しかし、良い判断、悪い判断という前に、もっと大事なことがあるのではないか。それは、自分の内側にたえず外からの言葉を入れるということです。今話を分かりやすくするために簡略化して言えば、内側というのは、わたしの考えや感じ方や、感覚、とにかく私の持てるものがあるところ。その自分がその都度判断するのです。だがその内側の扉を閉めないで、いつも開けておく。外からの言葉、それは何よりも聖書の言葉を聞いて、いれて、自分の内側と外からの言葉が交わる場所つくるのです。ときに聖書の言葉、イエス・キリストの言葉によって自分の内側が沈黙させられ、聞き従うということも起こる。多くは自分の内側のものが幅を利かせている。だが外からの言葉を聞くことはやめないでいれば、内側との交渉は必ず起こっていく。それが大事。それが根本的に大事。外からの言葉は、聖書だけでなく、人の言葉、本で読む言葉、出来事から聞き取る言葉、さまざま。ダビデもバルジライの言葉に聞き、自分の内側が沈黙し、聞き従っていった。しかし外からの言葉の根本に神の言葉に聞く、ということがなければならぬ。そうして内側が外からの言葉によって動かされていく、交わる。その中で聖霊の働きを信じ、判断していけたら。あとは神の働きのお任せする。それがわたしたちキリスト者の、神の言葉に聞く者の生き方です。ダビデ自身、自分の人生で何度も何度もそのことをかみしめながら歩んだのではないか、と思うのです。

新生教会礼拜堂